

オペラ「ジョニー劇場」

矢 邊 學

私の名はジョニーです。「ジョニーウォーカー」のジョニーです。ご存知のジョニーウォーカーには、赤ラベル・黒ラベル・ゴールドラベルの三種があることはよく知られている。愛称としてジョニ赤、ジョニ黒の二種類は日本人のお好みようだ。実はジョニーウォーカーには、更に、もう一つ上のクラスがあって、その名を「ジョニーウォーカー・ブルーラベル」と言う。

ご存知「ジョニーウォーカー」は、スコッチ・ウイスキーを代表する一品。英国スコットランドで製造されるウイスキーである。中世にアイルランドより製法が伝えられ、ビートによる独特の香りがある。スコットランドの法律では、『大麦芽の酵素によって糖化させた穀類の糖化液をスコットランド内で蒸溜し、木製の樽で最低三年間保税倉庫にねかせて熟成させたもの』と定義されている。誇り高きスコッチ・ウイスキーの歴史が刻まれているのが分かる。ウイスキーの語源について、調べてみた。すると実に貴重な意味のあることが分かった。ウイスキーは、アイルランド語の「ウシュク・ベーカー」(Uisce beatha)「生命の水」という意味である。

水(みず)がなければ人間は生きていけない。生物にとっても同じである。たかが水と侮る人はいないだろう。水

は命の源であるから……。古代より人は水辺を生活拠点として生きてきた。黄河、インダス河、チグリス・ユーフラテス河などの各領域で古代文明が芽生えたように、人は水と共に生きていく生き物である。

水の大事なことは、人はよく理解している。災害時、いわゆるライフラインが破壊され飲料水確保に支障をきたせば住民生活が不安となろう。水の確保は大事である。阪神・淡路大震災（平成七年一月一七日未明の午前五時四六分発生、マグニチュード七、三）はよい教訓である。

入院中に飲んだ水 私の水の有り難さを体験したのは、一六歳になりたての頃である。盲腸炎、腸閉塞と一〇日間で二回の手術で入院、手術後、執刀医から、「水を飲んでよろしい」と許可がでた。お袋が飲ませてくれた、水は本当に美味かった。「命の水」である。

山で飲んだ水 一九歳の夏、兄と一緒に会津の霊峰飯豊山（いいでさん）に登った。当時、飯豊山は女性入山禁止で山岳信仰の厚い山であった。飯豊山は、福島・山形・新潟三県に跨る飯豊連邦の主峰で標高二一〇五mである。飯豊連峰の最高峰は大日岳（標高二二二八mである。登山中、喉の渴きを癒してくれたのは、水筒の水であった。水を飲んで元気が出た。一泊した山小屋で飲んだ「コップ一杯の水は有料」であった。山頂の飲料水も有料であった。その時、水を飲むにもお金が必要であることを知った。コップ一杯の水の値段はいくらであったかは、私には分からない。兄貴が払ったからである。私は、のんびり家さんだったのだろう。

水の有料制は、「強力（ごうりき）」「ポーター」が、水や米、味噌などの食料品を「痩せ馬」（しよいこ）に乗せて里から山へ運ぶ費用が含まれているから、水の代金が必要になる、と説明してくれた。生命の水の尊さが分かるというものである。

今日、ペットボトルの愛称で呼ばれる飲料水の種類は極めて多い。飲料水に止まらず日本茶、ウーロン茶、麦茶、

番茶などあり、飲料水の中には輸出品があるとは実に驚きである。ペットボトルの氾濫状態は、単なるコマースリズムが先行しているように見えるのだが……水分補給の需要が多いことも否定できない。

水は大きく三つに分けられている。①生活用水、②工業用水、③発電用水だ。「水無くして生活立たず」である。

水は人間の一生と深く関わっている。人間と水との最初の出会いは、母親のお腹に居るとき、羊水とのお付き合いから始まっている。生まれては産湯につかり、人生最後の旅たちに際しては、「水」を飲む?……自然の摂理である。これ全て浮世の定めである。

古代中国では、治水者は国を治めるに等しいとされてきた。まさに水の重要性を表現する言葉である。「水」は命の源である、と同時に国の生命でもある。この言葉は万国共通である。水の重要性は、地球上に生息する動・植物の生命維持に必要不可欠である。しかも未来の宇宙空間で生活を営む場合でも全く変わることはない。

生命の起源について紐解けば、水中より生命体が生まれ、やがて地上に生息するようになったという。地球上の生物は、同様のプロセスを経て進化発展してきた。生物進化論を唱えたダーウィンの「種の起源」は有名である。

近年、熱帯雨林の一部に降雨なく、生態系に重大な変化を生じさせている。地球の一部に「砂漠化現象」が進んでいるという事実である。地球温暖化現象である。自然科学者は、地球温暖化の抑止政策に警鐘を発し、政治課題として国際社会の大問題となっている。

自然環境の破壊は、鉱物より人工的に産出された多くの化学物質によって、汚染された結果であることは自明の理である。「大気の複合汚染」は、地球上の生態系を破壊する魔物ということになる。人類は、この魔物と戦うことは必定であろう。二一世紀の重要課題の一つは、「人間の叡智」が魔物を征服できるかどうかである。人間の叡智は、豊かな人間の心に宿していることを知るべきである、と思う。「心の問題」は極めて重要であり、かつ、難しい課題

でもある。

日本列島北から南にかけて、官製談合が発覚、談合汚染である。官製談合当事者の言い分に共通する隠語(?)は、「魚心あれば水心」と言う、変な心である。摩訶不思議な人間関係の事例である。「世の中いろいろ」、「人生いろいろ」……なんだ。摩訶不思議なお話をエピソードを交えながら、許容範囲を悦脱しない限度で綴ってみることにしようと思う。

三〇四〇年昔のことは、水に流してしまったものもあれば、流しきれないことも山ほどある。公開自由の原則、否、公益通報者保護法の拡大解釈・適用しつつ、初公開に踏み切ることにしたのも若干存在する。いわば賞味期限切れと思えばそれでよしである。

じつは、(実話)? この辺で、本題に入りたいと思う。

法学部創設四〇年を記念して、オペラ「ジョニー劇場」の上演としたい。

※ ※ ※ ※ ※

オペラ「ジョニー劇場」のプログラムを簡単に紹介して置きましょう。

I 序幕

II 第一幕 比較法制研究誕生秘話

III 第二幕 緊急教授会招集

IV 第三幕 ジョニーの赤登場

V 終章

法学部四〇年の歴史の中で、私は、退職後三年間の空白期間がある。この期間はアット驚くドラマが展開してい模

様である。空白の三年間の出来事は、じつわ（実話）、摩訶不思議なお話で、オペラ・ジョニー劇場番外編である。

水の話について、もう少しお付き合いを願いたい。

中国では、古来より治水者は国を治めるに等しいとされてきた。地球の温暖化は、目に見えぬスピードで生活環境を変えて行く。日本列島にも近時、異常気象現象が続発している。例えば、竜巻や台風の種類は、北海道の大地に発生したことがなかったそうである。ところが、平成一八年一月、竜巻が北海道を直撃し、尊い人命が失われたことは記憶に新しい。地球の軸（軽度・緯度）にズレでも生じているのだろうか……？ 地球物理学の門外漢にとっては知る由もない。

人間の体の六〇％は水である。体の活動を維持するために、人は絶えず水を摂取し、排泄し循環させる必要があると言われている。水は生命を維持するため必要なのである。加齢と共に体内の水分が減少し、やがて枯れ木のように生命が失われていく、それは、皮膚にみずみずしさが失われる意味であると言う。水は国々よって違いがある。ヨーロッパ大陸の諸国では、アルプス山系からの天然水に恵まれているが、岩盤が厚いためカルシウム塩を多く含む天然水で飲料や洗濯には適さない硬水のため、ヨーロッパ大陸の国々（例えば、フランス、イタリア、ドイツ）では、葡萄から醸成したワインを飲む習慣が生じた。人間の知恵が働いたからである。まさに人間の「生活の知恵」である。今日、大量のペットボトルが出回っている。電車・バスの中、はたまた歩行中にラッパ飲みする人をしばしば見受けるのも慣れっこになってしまった。「慣れてしまう」悪弊は怖いものである。日本古来の伝統である「礼儀、作法」という「心の美学」（わび、さび）は、一体何処へ行ったのやら……もうボロボロオンボロである。

国士館の創設者柴田徳次郎は、「礼儀作法」の尊さを説き、「豊かな心の美学」を教育理念としている。学園内には、いろいろ批判分子が決して少なくはなかった。時の流れと風の吹きようでコロコロ心変わりする御仁？ が、何と多

いことか。在職中に味わったイヤナ味である。

海外生活体験者は、誰もが「飲料水には、お気をつけ遊ばせ……」と注意されたことを思いだすことでしょう。わが国では、昔から旅する人は生水を飲まない工夫がなされている。慣れない水を飲みお腹を壊し（下痢）、体調を崩し、いわゆるゲリ（下痢）ー・クーパーとなつては楽しい旅行も台無しとなるからである。

ヨーロッパ初旅行中、水に纏わる話の一つに「医師の教訓」、否、「医者の不養生」を地で行ったエピソードを披露しておこう。私の初渡欧は、今太閤と、もて映やされた自民党の実力者田中角栄幹事長が自民党総裁に選出され、第一次田中内閣が成立した昭和四七年の夏であった。

イギリスを振り出しにヨーロッパ八カ国（イギリス、西ドイツ、東ドイツ、フランス、イタリア、スイス、スペイン、オランダ）を旅行した折、ツアーのグループに内科医の夫妻が参加していた。夫のドクターが生理現象のためオートバンで緊急駐車を運転手に頼んで事なきを得た話である。バスに戻ってくるまでの時間が長かった。生憎土砂降りの悪天候、車内では皆が心配し、痺れをきたしていると当のドクターが戻ってきた。極り悪そうな顔をしていたドクターは、スイスのホテルで飲料水を飲み過ぎて、下痢をしました。「医者の不養生、眞に恥かしい。ご迷惑かけました」と丁重な釈明、車内が急に明るくなった。スイスから情熱の国スペインに向う途中の真夏の出来事であった。水にまつわるエピソードの一齣である。旅先では、飲み水には気をつけろ、と親より教えられて育ったのでゲリドクターのような失敗はなく、今日に至っている。水とお話はこれ位にして、先に筆を進めよう。

第一幕 序幕

序幕は、オペラの舞台である世田谷・鶴川両キャンパスの四〇年前に設定されてある。

両キャンパスとも、一時間目の授業開始時刻は、午前八時二〇分であった。小学校並みと言う影口を聞いたことがあった。教室などの掃除は、両キャンパスとも学生たちが行っていた。

鶴川キャンパスは、学部創設当時、随分不便を極めていた。スクールバスなし、歩道未整備、雨や雪の日の通勤・通学には皆が苦勞したものである。現在は、便利天国である。

世田谷キャンパス一〇号館（法学部・文学部教室）に入館するときは、教職員・学生共に土足厳禁で上履き使用の措置がなされていた。いわば、日本流であった。それに対し、鶴川では、靴を履いたまま教室に出入り自由で西洋風であった。なかなかユニークであったように思われる。けれど、文句を耳にしたことはなかった。

当時の学生諸君は生き生きしており、頼もしさを感じたものである。世田谷と鶴川には気温の差があった。都心の世田谷に比べれば鶴川は、二、三度の温度差が見られた。晩秋ともなると、よく風邪を引くことがあった。しかし、晴れた日には、鶴川団地の小高い所から、冠雪の富士山が見られた。心休まるひと時であった。鶴川駅から鶴川団地行きバスが開通したのは、法学部創設翌年の昭和四二年のことであった。今日、世田谷・鶴川両キャンパスには、往時を偲ばせるものは、殆ど見られない。

昭和四八年六月、近代化委員会が発足し、新生国士館が紆余曲折ではあったが、今日の発展へと道が開かれたことは、言うまでもない。

第一幕 比較法制研究誕生秘話

昭和五〇年九月、青谷和夫教授が第二代法学部長に就任した。同学部長は、前年に設置された「比較法制研究所」の機関誌発刊に意欲を燃やしていた。教授会でオー教授を編集担当者に指名承認された。一部には何でもホイホイ安受けやのオーじゃネ……学部長もどうかしているよ、学部長の人を見る眼力に疑問視する声が上がったのは事実である。ある時間が経過した。全く編集作業に着手していないことを知った学部長は、私にその尻拭いを依頼してきた。引き受ける理由がない。断った。学部長は私の講義日に研究室にきては、「このとおりだ、是非お願いする」と頭を下げられた。だが断った。学部長は編集担当者の人選は間違いだったという。そして、学部長は『責任はこの俺にある。君は「國士館法学」創刊号の編集実績があるではないか。俺が手伝うから協力してくれ……』頑固な私も折れ、いろいろなやり取りをすっかり水に流し、学部長と一緒に敬文堂へ出向いた。オー氏は何もしていなかった。学部長と敬文堂の阿久津さんそれに私の三人は、表紙のカラー、活字の大きさ（本文の活字ポイント、注の活字ポイント）、誌名の活字及び書体、本字は略字どちらにするか等など納得のいくまで検討を重ね、いわば難産の末に誕生した。現在、刊行中の「比較法制研究」誌である。本字を使用したのは、戦前からの日本語である本字を使用するのが正しいと考えたからである。「國士館法学」には、「國士館大學法學會」の本字に統一した。

國士館法学の編集は菊池定信教授と協働作業の成果であり、本字使用は両者の一致した見解によるものである。「比較法制研究」誌には、「國士館大學比較法制研究所」と、大學名等は本字を使用している。日本語の難しいのは当然で、読み方に音読み、訓読み、重箱読みの三つの読み方がある。文字には、カタカナ、ひらがな、漢字（本字、

略字、当て字？ 等など）があり、漢字文字を見ると凡そ意味が理解できるから実に不思議な言語であると思う。國學院大學では、すでに「大學名」を本字に改めている。

第二幕 緊急教授会招集

第六代学部長に富田敬一教授が就任した。近代化委員会の学部長選出が各学部の「学部長選挙規定」に基づく選挙が実施された。学部長候補者の氏名が黒板に書き出された。いろいろと情報が乱れ飛んだ。この場においてもオレガ氏が色気たっぷりで地位と名誉が欲しいと言う人は何処の世界にも一人や二人はいるものである。私は真っ先に候補辞退を宣言した。何人か辞退の意思を表明、最後に残ったその人の名は第六代目の学部長であった。

学部規則も整っていない時代、早急に学部諸規則を作成する必要があった。一つの例を取り上げる。「法学部選任教員採用規則」がケー教授によって原案が作成され、教授会で承認可決された。その規定に基づく採用人事が教授会にある教授の推薦で教授会に提案された。ところが、採用規定の条項に違反するものであった。承認出来ない重大なミスが判明した。推薦者の説明はモゴモゴいうのみで埒が明かない。人事委員会は厳しい意見が続出した。水に流すことは出来ない。定例教授会は毎月一回、臨時教授会は必要に応じて、正式な手続きを経て、学部長が教授会全構成員に教授会開催日の七日前に到着する教授会開催通知を発しなければならぬ。採用人事に関する本件事案は、定例教授会、臨時教授会には、時間的に間に合わない。ほって置けば、学部長の責任問題に発展するのは必定である。苦肉の策を講じたのが、緊急教授会の招集であった。事情があると言う人もいた。しかし、緊急事態に対処するために、緊急教授会開催時刻は午後六時に決定し、速やかに電話連絡をするよう提案した。国会は真夜中でも開会するの

である。ビクビクせず、すぐ実行されたい、と念を押した。学部長は心配したが、教授会メンバーは、全員出席した。時刻とおり、緊急教授会は開催された。候補者のケーさんは、一年留保付で規定の条件を満たすことで再検討することになった。些細なことのように思われがちであるが、お惚けを平気にするヤツは信用できない。一年後、法学部スタッフに迎えられた、新進氣鋭の学者として活躍しておられる。

第三幕 ジョニーの赤登場

いよいよ「ジョニー赤」のお出ましである。学部長が二人実在した頃の摩訶不思議なお話である。

法学部創設前後の時代、日本人の海外旅行のお土産は、ジョニー黒か赤のウイスキーか、外国のタバコ等が免税店で買って帰るのが、極々普通のパターンであった。ジョニー黒のウイスキーは人気が高かった。何しろ為替ルートが一ドル三六〇円当時のことであるから……。現在、この商品の人気はご承知のように下落している。

ところで、法学部四〇年の歴史のなかで、様々な出来事があった。教授会が出来つつあった頃、二名の教授が法学部長を名乗り、学部長が二人出現した。館長任命の学部長A教授と法学部教員有志により選出されたB教授である。二人学部長は、法学部の先輩学部である政経学部I部においても出現を見ている。現時点から見れば、至極滑稽である。しかし、当時は、各教員はそれぞれの意思によって学部長を支持していたことは確かである。法学部においては、A教授を支持する教授は当時の年配教授でしかなかったように思われる。自然淘汰の原理よろしくA教授は辞任し、法学部は正常な方向に歩むようになった。

B学部長時代、X教授が定年後、非常勤講師をお願いするか否か教授会が開催された。なかなか意見が出ない。B

議長は、投票による採決を提案、満場一致で投票することに決まった。投票の結果は、可否同数となった。かかる場合は、議長（学部長）の一語によって、決まる。B議長は、X教授を非常勤講師としない旨の結論を下した。

後日、X教授の件につき、臨時教授会が開催された。教授会開催権である学部長の開催の趣旨説明の冒頭で、「実は、X教授がジョニー赤二本を持参し、非常勤講師再考をお願いされた云々……と。」耳を疑ったが、真実のようである。結論は、学部長自身が決定したことを、「ジョニー赤二本」で自らの決断を撤回した暴挙は、責任者たる資格が欠如しているといわざるを得ないだろう。他方、ジョニー赤二本は一時的に命を救う結果を齎した事になるだろう。命を救ったのは「生命の水」ジョニー赤という名のウイスキーであった。

X教授は、ウイスキーの語源を知っていたのだろうか。そんなことより、可否同数の場合に議長たる人が自らの意思決定を屈返すとは、学者と言うより政治やと云われても仕方ないだろう、と思う。

終幕

いよいよ、終幕を迎える舞台となった。学生諸君と共に「ゼミ旅行」は本当に楽しい思い出が残っている。会津「芦の牧温泉」に一泊二日のゼミ旅行は、楽しかった。親父の最肩していた温泉旅館でサービスがよかった。私を「怖い先生」と思っている学生が多かった。本当は心優しいのにな……と私は思っているのだが……。ゼミ旅行に参加した沖繩から来た学生がおった。彼は、「本当は、心の優しい先生なんだ。誤解していたことが恥かしい」と言っ
て男泣きした学生の顔を今も鮮明に覚えている。私には、多くの学生から、答案の採点が辛い、答案は、黒のボールペン使用とうるさいと言う評判・批判があったが、それは、他が甘すぎるからだと言って軌道修正をすることは一

切しなかった。

第八回模擬裁判「土地・家屋明渡し請求事件」（昭五一・一二・六、法学部二〇二号教室に世田谷区地方裁判所を（設定）の指導担当した折、学生を連れて裁判所を見学することにした。現在の最高裁判所が完成間もない頃であった。特別見学の許可を得て大法廷を見学することができた。裁判官の着用する法衣を学部長にお願いして作ることが出来た。模擬裁判の様子は、8ミリ映写機で撮影した記録フィルムがある。

模擬裁判スタッフの有志一四名と一緒に奥松島へ二泊三日の旅行も思い出として記憶に残っている。椿幸雄教授が一緒であった。帰京するとき、仙台駅で「横綱玉の海」の急逝をニュースで知ったのも印象に残った。

私が学部長の時は、全国の各大学が学生定員増の申請を競っていたよき時代であった。しかし、当時、経団連（日経連と合併し、現在、日本経済団体連合会となる）は法学部を卒業した者が法律を知らない、大学の法学教育に対する痛烈な批判がなされた。国士館も例外ではなかった。この頃から大学教員の自己点検が公に取り上げられるようになった。しかし、すでに東京理科大学では自己点検が実施されていた。教員組合の書記長を務めているとき、教員の自己点検がなされることを発言した。青筋立てて反論した者があった。

法学部は、「学習ガイドブック」を作成した。学長、理事長の評価は高かった。教員の自己点検に備えてのものであったことを、披露して置く。回顧録となってしまった。ご寛容下さらんことを念じつつ筆を置く。

（平一八・一二・八記）